

山村暮鳥

いの 民衆詩人 水戸市・大洗町



(「水戸の先達」より転載)

明治 17 年 (1884) - 大正 13 年 (1924)。群馬県棟高村〔高崎市〕の農家志村家に生まれ、家庭の事情により伯父の養子となる。本名は木暮八九十。明治 32 年 (1899) より小学校の代用教員となり、その後、前橋聖マテア教会の英語夜学校に通い洗礼を受ける。同 37 年 (1904) には短歌 3 首が雑誌『白百合』に掲載され、これ以降、文学活動と伝道師としての活動を並行していく。同 44 年 (1911)、水戸へ赴任。途中いわきへ転任するも再び水戸ステパノ教会へ着任した。水戸の若い詩人たちが暮鳥をたてて、「黎明会」を組織し、雑誌『苦惱者』を創刊して詩作活動の展開を図った。その後、肺結核や咯血と闘いながら大洗で創作活動に取り組む。没後に刊行された詩集『雲』は、暮鳥作品の集大成として高い評価を受ける。

山村暮鳥は、明治 17 年 (1884) に群馬県棟高村〔高崎市〕に生まれました。家庭の事情により両親と一緒に暮らすことができなかった暮鳥は、辛い幼少期を過ごし、伯父の家へ養子にいました。その後、小学校に通うようになった暮鳥は、ようやく父母とともに暮らせるようになり、貧しい中でも家の手伝いをしながら勉強に励みました。15 歳にして暮鳥は小学校の教員となり、昼は学校で教え、夜は近くの寺の住職に漢学を学んで努力を重ねました。17 歳の時からは、前橋市の教会で開かれていた英語夜学校に通うため、毎夜 7 里〔約 28km〕もの道を通い、一生懸命に勉強しました。

勉強に励んでいた暮鳥は、教会の宣教師たちにも認められ、洗礼<キリスト教の信者となること>を受けました。また、宣教師ミス・ウォールからの援助を受けて東京の神学校へ進みました。キリスト教の勉強を深め、人々の幸福を考える日々を送るようになっていきます。

キリスト教の勉強とともに、暮鳥は短歌や詩の創作にも心がひかれていくようになりました。はじめ、短歌の創作に打ち込み、次第に詩や童話の創作も行うようになっていきました。

その後、暮鳥は、秋田・仙台・いわきなど各地の教会で牧師の仕事をしていながら、代表作の詩集『聖三稜玻璃』や『風は草木にささやいた』を出すほか、雑誌『苦惱者』の創刊など精力的に文学活動を展開します。

しかし、大正 7 年 (1918) に水戸ステパノ教会に転任したころから暮鳥は結核を患って教会での牧師の仕事を支えられなくなり、やがて仕事を休まざるを得なくなってしまいます。

翌 8 年 (1919)、初めて大洗〔大洗町〕を訪れた暮鳥はこの地をとてとても気に入る住むことになりま



詩碑 (水戸・保和苑内)

す。海に近く、自然豊かな大洗は、体調がすぐれない暮鳥にとってとても過ごしやすい場所でした。しかし、教会での仕事に支障をきたし、収入の道は途絶えがちになります。以後5年半ほど大洗で過ごしますが、その期間は、貧しいながらも東京にいた妻子を大洗に呼び寄せ一緒に生活ができたので、暮鳥にとっては幸せだったといえるでしょう。この時期、暮鳥は詩・童謡・童話・小説を数多く発表しています。

大正13年(1924)に40歳で亡くなりますが、翌年、最後の詩集『雲』が刊行されました。その中に収められた1篇を紹介します。

おうい雲よ
ゆうゆうと
馬鹿にのんきそうぢゃないか
どこまでゆくんだ
ずっと磐城平の方までゆくんか

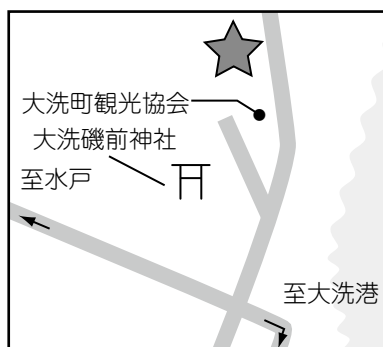
群馬県生まれの暮鳥が、水戸や大洗で過ごした時間は長くはありません。しかし、大洗の美しい風景と生活は暮鳥の心に深く刻まれていたに違いありません。

ゆがりのスポットに行ってみよう

山村暮鳥詩碑

所在地 東茨城郡大洗町磯浜町 8249 - 7

内容 山村暮鳥が暮らした大洗町に、その生涯を紹介する説明板と詩碑が並んで建てられています。



おもな 参考文献

『水戸の先達』(水戸市教育委員会・2000)

『山村暮鳥展—磐城平と暮鳥—』(いわき市立草野心平記念文学館・2005)